ARCADIA

58

AUTUMN 2013

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
［アルカディア］

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM

岡崎市美術博物館

眼の極楽⑨　江戸の花園

館長　榊原悟

鶯と郭公

質問から始めよう。

監督黒澤明の数ある作品のうち、好きなものは何だろうか。

「羅生門」？　昭和二五年（一九五〇）の製作、翌年九月ベネチア映画祭でグランプリを受賞した。戦後日本映画の躍進ぶりを象徴する作品だ。斬新な手法と内容が、後年の、例えばアラン・レネの「去年マリエンバード」（一九六一年）に大きな影響を与えた。

いや、影響と云うのなら「七人の侍」（昭和二九年）も忘れてはならない。言うまでもなく収穫どきになると村を襲う野盗から、村を護るべく立ち上がった侍たちの物語だ。これの西部劇版がジョン・スタージェスの「荒野の七人」（一九六〇年）であることは、すでに周知であるに違いない。戦いのシーンの壮大なスケール、その迫力は、これが六十年前の作とは到底思えない。しかも百姓たちの狡猾なまでの図太さ、したたかさまで描きだした。まさしく両作品共に黒澤の代表作と呼ぶに相応しい。

だがわたしには「椿三十郎」（昭和三七年）も捨て難い。先の二作と違って、これを鑑たのは封切りのときだ。それこそ西尾の松栄館においてである。

むろん、公開時の評判も聞いている。三十郎（三船敏郎）と室戸半兵衛（仲代達矢）との決闘である。互いに向かい合う長い沈黙の後、三十郎の居合い一閃、室戸が血しぶきを上げて倒れる。その壮絶なシーンや、ドサッ、バサッという斬殺音を入れたことなどが話題であった。人を斬ると、どんな音がするのか、実のところ誰も分からないはずで、音源をどうしたのか―死んだブタを斬ってみたとか、さまざまな憶測を呼んだが、こうして効果音を入れるのは慥か「椿三十郎」が最初で、これによってそれまでのチャンバラの立ち回りはリアル？に一変、以後の時代劇はテレビ映画も含め、すべてこれに倣った。影響の大きさから云えば、これこそが黒澤時代劇最大の成果だろう。

いや、効果音の有無だけではない。丁寧に造ったセット、それを撮るカメラワークも見事だ。なかでも一見以来忘れられないのは、椿屋敷の茶室のシーンだ。

大目付らが謀議をこらす。と、躙口の板戸がスーッと開いて、室戸（仲代）が姿を現す。ギラギラした抜き身のような危険な人となり―小さな躙口の向こうに覗く、大きなその姿は圧倒的、凄い存在感だ。仲代の好演もひかるが、監督たる黒澤の映像の魔術だろう。

物語は、そうした優れた映像を連ね、小気味よいテンポで進む。スピーディーな展開が鑑る者をして飽きさせない。むろん内容も明快。しかも緊迫したシーンの合間々々に、それを解きほぐすようなシーンが入る。それらが生み出す健全な娯楽性と大衆性、それこそが、「椿三十郎」を第一級の作たらしめている所以であろう。わたしがこの作品を好きなのも、それ故だ。

問題は、その合間々々に入れるシーンである。そこでは、入江たか子（かつて化け猫女優の異名をとった）と団令子が好い味を出している。二人は城代家老夫人とその娘、そうした育ちの良さから来るおっとり感が、野の人三十郎と絶妙の対比をみせ、笑いを誘う。「乗った人より馬の方が円顔」と噂された城代家老の伊藤雄之助（当時、頤がはずれたかのような長顔でも評判をとった名優）といい、カラッとした明るいユーモアこそが「椿三十郎」の人気と魅力を支える、もう一つの要素であったのだろう。椿三十郎ならぬ桑畑三十郎が主人公の「用心棒」（昭和三六年）との違いも、このユーモアの質の差にある。

いや、合間にさらにもう一つ、鑑る者の心をなごませるシーンがあった。主人公の名や題名、ついには大団円に向けての狂言回しにまで使われた椿である。それが咲く庭や流れのショットが、繰り返し挿入される。その際、場面に余りに当然過ぎて、つい忘れてしまうのだが、ぴったりの効果音が必ず添えられていた。

その音は・・・。斬殺音？いや違う。そう、鶯の声である。その声が画面に朗々と、よく響く。物語の進行とは無関係にも聞こえるが、その長閑な声が、むしろ物語の切迫感をいっそう際立たせる。城代家老夫人の浮き世離れした言動といい、上手い演出

である。

椿に鶯。梅に鶯になぞらえられたものだろう。もっとも梅三十郎では、いかにも語呂も悪い。椿にしたのは、黒澤の洒落とも言えそうだが、しかし、この組合せ自体は、すでに芭蕉も、

うくひすの笠おとしたる椿哉

と吟じているから、全くないわけではない。言うまでもなく『古今集』に、

青柳を片糸によりて鶯の
ぬりてふ笠は梅のはながさ　　読人不知

とか、

鶯の笠にぬふてふ梅の花
折りてかささむ老かくるとや　　源常（嵯峨天皇第三皇子）

とか、歌では、しばしば詠まれた鶯の花笠の梅を、椿に置き換えたもの。これによって芭蕉は、古歌の俳諧化を図ったのだろう。

そう云えば、いま長閑な鶯の声と言ったが、鶯の声に長閑な味わいを感じる—現在ではごく当り前の心の動きだが、わたしたちにそれを教えてくれたのも、実は俳諧の感性・美意識ではなかっただろうか。

うぐひすや家内揃ふて飯時分　　蕪村

なるほど。この飯は昼飯だろう。それを喰って心と体も寛ぐ。「家内揃ふて」の語が何とも効く。そこへ鶯が鳴く。これほど長閑で平和な情景はあるまい。蕪村、絶妙の修辞学（俳諧）である。「椿三十郎」の鶯の声の背景にも、間違いなくこの俳諧に培われた美意識があったのだ。

となると蕪村は、鶯ならぬ郭公の声をどのように修辞したのか、やはり気に掛かる。

鞘走る友切丸やほととぎす

平安城の大空を筋違＝一直線に翔ぶ、その姿と鳴き声に、源氏重代の名刀の鞘走る一閃を見た。蕪村にそう思わしめたのは、鶯の長閑さとは対極にある、郭公の声の切迫感であったに違いない。

では王朝人は、逆に鶯の声に何を感じ、愛でたのだろうか。むろん、その声に聞き惚れていたのは疑いないのだが。しかし、なかには清少納言のように、

鶯は、世になくさま、かたち、声もをかしきものの、夏秋の末まで老い声に鳴きたると、内裏のうちに住まぬぞ、いとわろき、また、夜鳴かぬぞ、いぎたなきとおぼゆる
『枕草子』鳥は

と、季節が変わっているのに、いつまでも鳴いているのが気に喰わない者もいたようで、郭公が「六月などにはまこと音もせぬか」と、ぴたり鳴き止むだけに、いっそ腹立たしかったのだろう。だが、清少納言がそう思うについては、鶯の声が、

春きぬと人はいへども鶯の
なかぬかぎりはあらじと思ふ　　壬生忠峯

鶯の谷より出る声なくば、
春くることをたれか知らまし　　大江千里

と、春の到来を告げる声であったからで、その思いが強ければこそ、夏秋までも「老い声」に鳴き続けるのが許せなかったのだ。しかも、その春は、

あらたまの年かへるあしたより
待たるゝものは鶯の声　　素性

あらたまの春である。王朝人の鶯の初音を待つ気持ちは、夏の到来を告げる郭公の初音にも増して強かったに違いない。

その初音の語を『源氏物語』第二三帖は、帖名とした。

年月をまつにひかれて経る人に
けふぐひすの初音きかせよ

明石の君が、別れて暮す姫君に、鶯の初音ならぬ初便りを求めた一首である。初春を迎えて浮き立つ六条院、その華麗な暮しを、さらに長閑に華やかに彩る—鶯の声こそは、それであった（続く）。

六条院の暮し 初音 サントリー美術館本『源氏物語画帖』

ESSAY

あいちトリエンナーレ2013並行企画事業

ユーモアと飛躍 そこにふれる

千葉真智子

展覧会も半ばを過ぎ、この号が発行される頃には、会期も終わりに近づいていることと思います。どの展覧会も少なからずそうですが、今回も作家の方をはじめ、関係者の皆さんのアイデアや意気込みに助けられました。

展覧会の会場構成にしてもそうです。展示室の下見に来られた時点で、池田晶紀さんも泉太郎さんも、美術「博物館」らしい大きなガラスケースに興味を持たれ、ここでしかできない作品体験をしてもらえるようにとアイデア出しをしてくださいました。池田さんはケース内の無音空間を歩けるようにと、また泉さんは、ガラス面を白い絵具を塗ることでスクリーンへと変化させ、あらかじめ投影しておいた映像を浮かび上がらせるという手法を展開し、しかもそのガラス―ス内を通って、展示室の裏側へと移動する動線を作ることで、会場全体が有機的につながるような仕組みを作り上げてくださっています。こちらが当初から、作家別に単独の展示空間を作るのではなく、緩やかに全体がつながるような展示構成を企図していたので、それを上手く汲み取ってくださったのだと思います。小林耕平さんからも、早い段階で会場に映像＋オブジェクトの作品を点在させたいとの意向を伝えられていたので、そのアイデアも結果的にこちらのプランを後押ししてくれることになりました。こういう訳で、今回の展示では、広い空間に、小林耕平さんとD.D.、花岡伸宏さん、それに長谷川繁さんの作品が同居し、あるいは展示ケースを使った泉さんの作品に呼応するように、小林さんの最後の作品の台座を使ったオブジェクトの展示が展開していたりします。もちろん、一人の作家の作品を単独の空間でじっくり味わいたいという意見も当然あるかと思います。しかし今回、敢えて交ぜることで、思わぬ作品の繋がりや解釈の広がりが発見できたこともまた事実です。

本展はイベントも多く、小林さんのデモンストレーションが五回、D.D.のワークショップが四回あり、ほかにも、池田さんのワークショップに泉さんのパフォーマンス、長谷川さん、花岡さん、八木さんの作家トークもあります。小林さんのデモンストレーションでは、毎回異なるゲストを招いて、作品「ゾ・ン・ビ・タ・ウ・ン」を前に、いかにゾンビを出現させることができるかを真剣に討議するのですが、これが独特の時間の経験で癖になります。既に終了したゲストも、知覚論・芸術論の平倉圭さん、漫画家の榎本俊二さん、小説家の仙田学さんと、異ジャンルの方ばかり。二時間半近くに及ぶ長丁場を、本気で頭を使って考えるので、やっている方はクラクラになるらしいのですが、見ている側も、ハッとさせられる話が断続的に訪れるために、続きを聞かざるを得ない気持ちになって、際限がなくなってしまいます。D.D.のワークショップは、住居型の展示作品「2つで三人」の空間内で、「不合理な一石二鳥のティータイム」を催すというものなのですが、これも、可動式の壁やキャスター付きの家具を動かして、ダイニングルームを作り、お茶を沸かしてケーキを食べ、さらに今度は個室を各自が作るという、普段美術館では得られない体験です。また、マンガ家のタナカカツキさんと一緒に池田さんが行ったワークショップは、自然豊かな当館のロケーションを最大限に活かしたものとなりました。

残りの期間、より多くの方に本展およびイベントを体験していただけることを願うばかりです。

EXHIBITION

小林耕平×榎本俊二 デモンストレーション

会期：平成25年8月17日（土）～10月20日（日）

祈・PRAY
—古今東西祈りの風景

浦野加穂子

ジョルジュ・ルオー《ミセレーレ》より 1923年
岡崎市美術博物館

祈り—それは古より人々の心に息づいてきた根源的な心情です。信仰の最も端的な表現である祈りは、教義や思想として文章に表されるだけでなく、絵画や彫刻等の作品として表現され、そのなかには人々の思いが込められています。今回の展覧会では当館の収蔵品を中心に、いにしえから近代に至るまで、洋の東西を問わず、人々の祈りや願いが表現された資料や美術品を紹介します。

岡崎市は古代より数多くの寺社が建立され、悠久の歴史と豊かな文化を育んできた地域です。五九〇を超える寺社が現存し、市内には数多くの文化財が伝えられています。

古の人々は、厳しい自然の威力に超自然的なカミを感じ、呪いなどを心の拠りどころとしました。縄文土器や土偶には、呪術的な意味や大地の豊穣、母性などが表現されているとみられます。また古墳に立てられた形象埴輪は、墓域の結界や葬送儀礼に用いられ、副葬品には死後の世界への旅立ちを祈る気持ちが込められています。

6世紀頃に仏教が日本に伝わると、飛鳥から白鳳時代にかけて寺院が盛んに建立され、西三河最古の寺院である北野廃寺もこの頃創建されています。平安時代初期には最澄と空海が唐から最新の密教を伝えました。滝山寺や甲山寺等の天台宗の古刹には、密教の世界観を表した両界曼荼羅などが伝えられ、本地垂迹説により滝山寺の鎮守である日吉山王社には、御神像として僧形男神坐像(大宮)などが祀られています。

EXHIBITION

平安時代、末法思想が広がる中で、阿弥陀如来の本願を信じ、西方極楽浄土への往生を説く浄土教の教えが急速に広まりました。平安時代末期には、法然が専修念仏の教えを説く浄土宗を、鎌倉時代には親鸞が浄土真宗を開きました。三河は古来浄土宗や浄土真宗の盛んな地域であり、これらの寺院には西方極楽浄土の様子を表した当麻曼荼羅や阿弥陀来迎図、阿弥陀仏の名号などが伝えられています。

鎌倉時代には宋に渡った栄西と道元が、本格的な禅を日本に伝えました。自らと向き合い、坐禅などの修行を重ねて悟りに至る禅は武将たちの精神的な支柱となり、その支持を得て全国へ広まりました。また禅と共にもたらされた水墨画により、達磨などの祖師像や禅の思想を画題とする禅画が描かれました。

江戸時代になると庶民の間に様々な神仏への信仰が広まりました。庶民の祭礼は、ハレの場としての華やかさや信仰心に加え、結願や祭礼の成功のために共同で行動することで、地域の連帯意識を深める場となっていることが特徴です。岡崎では「飾り馬」や「田扇祭り」などの祭礼が行われています。

当館ではまた「マインドスケープ(心象風景)」をコンセプトに、バロック絵画から現代美術まで心を伝え、心を語る美術品を収集してきました。

本展ではキリストと聖母マリアへの信仰を示す作品を中心に展示します。テーマは聖書からとられ、生涯や事績、寓話や奇跡譚、マリアの母性を象徴したものがあります。また二〇世紀最大の宗教画家と称されるルオーの版画集『ミセレーレ』は、第一次世界大戦の惨劇を機に制作され、人間の苦悩と罪深さ、そして平和への祈りを表現したルオー作品の頂点を成すものです。

価値観の多様化や国際化が急速に進展する今日、人々の祈りの表現を通して、様々な文化やその根底にある人々の「心」への理解を深めて頂ければ幸いです。

会期：平成25年11月2日(土)～12月23日(月・祝)

集荷の旅（13）

副館長　荒井信貴

展覧会での集荷で様々な所有者を回りましたが、やはり緊張するのは個人のコレクター、高名な古美術商からの借用です。美術館・博物館は一度文書を交わしてしまえば大きな変更はなく、どこかビジネスライクに事は進みますが、個人コレクターではそうはいきません。気に入らないことがあればそれまで。別にあえて人様に貸す必要はないからです。高名な古美術屋さんで、下見の段階で偽物を混ぜ、学芸員の力量を測るといった話も聞きます。その話を聞いたお宅にも伺ったことがあるのですが、ご主人が代替わりしており、近世絵画を借用に行ったのですが、焼き物の話ばかりでつないで事無きを得ました。また、梱包作業中に、古美術商主人の出身幼稚園で国の重要文化財に指定されている建物を見に連れて行かれたこともあります。やはり近世絵画の借用でしたが、専門ではないので文化財一般の話をしていたからでしょうか。

コレクターで印象深いのは、広島の佐藤辰美さんです。自動車関連部品の製造を主とする実業家とだけ聞き、『「森」としての絵画』の時に現代絵画を借用に伺ったのですが、そこはまるで美術館。後で聞くと日本有数の現代美術コレクターで、そこは伝説の完全予約制大和プレス・ビューイングルームとして知られているとのことでした。門外漢ながらも、所有者を選ぶと聞いていた河原温の作品がまとまってあることにも驚かされ、氏の選択眼の鋭さの一端を知ることができました。知的で温厚な佐藤氏から仏像など古美術の収集から始められ、現代美術へと幅を広げられた経緯や内外の作家を招聘しての活動を聞かせていただく内、こちらの専門が考古学と知るとすかさず話をふってこられ、様々なジャンルにわたる書架の本を話題に話は進みました。自らの審美眼に信を置き作家を育てるパトロンとしての氏の度量に包み込まれた心地よいひと時でした。

COLUMN & TOPIC

「JOY OF LIFE」と仏のふところ

村松和明

今回のあいちトリエンナーレでは、名古屋会場に次いで岡崎が第二会場となった。東岡崎駅ビル、康生会場、松本会場の三か所での開催。当館もそれに並行して「ユーモアと飛躍」と題した現代作家の展覧会を開催している。松本会場は、かつて花街として栄えた松應寺の昭和の空気を存分に残した廃屋や旧店舗を利用して展示がなされた。出品作品の中には、その雰囲気をうまく取り込んだものがあった。その寂れた路地を歩いてゆくと、松應寺の方向に「オノ・ヨーコ →」という案内板が目に入った。今回のトリエンナーレのビックネームの一人であるその名前に誘われるようにして境内に入ると、本堂正面の杉戸に一枚の白紙が見えた。近づいて見るとそのB3サイズほどの白紙は数個の平画鋲で留められ「JOY OF LIFE YOKO ONO 2013」と、印字されていた。思わず私は、近くにいた担当と思われるスタッフTシャツ姿の年輩男性に声をかけた。「これが、オノ・ヨーコさんの作品ですか？」すると彼は苦笑しながら「それだけです…」と言うと、ぷいとあちらを向いてしまった。きっと日に何度も聞かれているのだろう。オノさんは、名古屋本会場ではいくつもの作品を展示し、参加型のイベントも開催されている。しかし第二会場の岡崎となると、このような薄っぺらな紙一枚となってしまうのか。いや、これはお堂の真正面に貼られているのだから、ただの紙などではなく「生きる喜び」のご利益がいただけるような、ありがたいお札のような効能を持つのかもしれない。しばし考えてみたが、それは仏のみぞ知る…であろう。

ならばこの際、仏のふところでもお借りして、オノ・ヨーコさんにも、名古屋会場のみならず、侘び寂びのきいた静かな岡崎会場や、丘の上にあって一人でも多くのご来場を呼びかけている当館にも、是非ともお運びいただけないものかと、思いをめぐらせるのであった。

美術博物館ウェブ事情

酒井明日香

芸術の秋、各所で気になる展覧会が目白押しですが、みなさん展覧会の情報はどのようにして知りますか？テレビや新聞？チラシやポスター？友達からのクチコミ？いろいろな場合がありますが、そうやって知った展覧会について詳しく知りたいと思ったとき、ホームページで調べる方は多いのではないでしょうか。

そうして調べてくださったユーザーの方に多彩な情報をわかりやすく発信するべく、「ユーモアと飛躍　そこにふれる」展では特設ページを作成しました。展覧会特設ページの作成は、平成二十三年度に開催した「桃源万歳！」展と「村山槐多の全貌」展以来です。ここ数年はなかったホームページの作成量に苦戦しましたが、無事公開にこぎつけました。おかげ様で多くのアクセスがあり、特設ページを通して少しでも展覧会に興味を持っていただけたなら幸いです。

また、ホームページとは異なるゆるい情報を発信する場として、公式Facebookページをはじめました。普段なかなかお伝えする機会のない、展覧会の裏側やこぼれ話を中心に更新予定です。みなさんの「いいね！」をお待ちしています！ちなみに中の人は固定ではないので、文体の違いから誰の投稿か推理するのも楽しいかも？

またFacebookページの公開にあわせ、スマートフォンからでもアクセスできるよう、ホームページのメニュー部分にも若干の変更を加えています。今までメニューが表示されずご不便をおかけしたスマートフォンユーザーのみなさまも、一度アクセスしてみてください。

ユーモア展特設サイト画像

COLUMN & TOPIC

一隅を照らす

湯谷翔梧

「一隅を照らす。此則ち国宝なり」は、天台宗を開いた最澄が著した書の冒頭に出てくる言葉のようです。恩師の座右の銘でしたが、「ユーモアと飛躍　そこにふれる」に展示された泉太郎さんの「対策」に接して、久しぶりに思い出しました。

この作品は細い通路の突き当りにあり、電気スタンドのほの暗い光が文字通り一隅を照らしています。机上には一冊の日記が置かれていて、一日一頁、その日の記録が記されているのですが、その内容が実に面白いんです。

例えば「(Chair and Mirrorの体験中)ヘッドホンから流れる『カシャカシャ』という音に満面の笑みで『久しぶりに髪の毛を切る音を聞いたよ』とつぶやきました。そうこの男性は髪の毛が薄いんです。…奥さまは感傷にひたるご主人をおいて先に行かれました。」という感じ。このようにご来館いただいたお客様の様子が毎日記されていました。

この日記を書いていたのは監視員の皆さん。当館も多くの人々によって成り立っていますが、監視員は常にお客様・作品と直に接しているので、展覧会への反響やご意見、展示の細かな変化まで貴重な情報を提供してもらっています。その意味でも欠くことのできない、まさに一隅を照らす存在です。最澄の言を借りれば、「是即ち館宝なり」というところでしょうか。

この展覧会は体験型の作品も多く、監視員の皆さんには一隅どころか全体で大活躍いただいていますが、普段は鑑賞に障りないよう展示室で静かに座っています。

そうした静かな佇まいと、「対策」の微かな、けど確かな光が展示室の片隅を照らしている光景が見事にリンクしていて、「対策」は今回最も好きな作品の一つです。

けどこの記入、結構大変だったそう。監視の皆さん、お疲れ様でした。

INFORMATION

やさしいミュージアム講座（前期）「トリエンナーレが楽しくなる！」
10月19日（土）午後2時～
講師：志賀理江子氏（トリエンナーレ出品作家）
先着40名聴講可

ユーモアと飛躍　そこにふれる

2013年8月17日（土）～10月20日（日）

■小林耕平デモンストレーション
10月20日（日）午後2時～
ゲスト：core of bells（5人組バンド）

祈・PRAY

―古今東西祈りの風景―
2013年11月2日（土）～12月23日（月・祝）

■講演会
11月17日（日）「大昔の人のくらしと祈り」
講師：加藤安信氏（岡崎市文化財保護審議会委員）
12月1日（日）「地獄絵のたのしみ」
講師：鷹巣純氏（愛知教育大学教授）

■クリスマスコンサート「祈りの響き」
12月21日（土）
演奏：伊東かおり氏（ヴァイオリン）、小畑友美氏（フルート）、高田知子氏（ハープ）

■学芸員による展示説明会
11月23日（土）、12月14日（土）
いずれも午後2時～

≪やさしいミュージアム講座（後期）受講生募集≫

■大樹寺を知ろう！
11月～3月の毎月第2水曜日、10:30～12:00　※ただし3月は14日（金）
内容/松平・徳川氏の菩提寺として名高い大樹寺の歴史や美術について、当館学芸員が分かりやすく解説します。
講師：当館学芸員　定員70名　当館1階セミナールーム

■儀礼の屏風
11月～3月の毎月第3金曜日、14:00～15:30　※ただし1月は休講・3月は7日（金）
屏風絵が人間の通過儀礼のなかで、どのように使われたかを考えます。
講師：榊原 悟（当館館長）　定員70名　当館1階セミナールーム

≪共通≫参加費／無料　□申込方法／往復はがき、またはメールに希望講座名（1通につき1講座の申込）・郵便番号・住所・氏名（ふりがな）年齢・性別・電話番号を明記の上、10月22日（火）必着で下記までお申し込みください。※ハガキ・メール一通につき1人の申込に限ります。※応募多数の場合は抽選となります。□申込先／〒444-0002　岡崎市高隆寺町峠1番地　岡崎中央総合公園内　岡崎市美術博物館「やさしいミュージアム講座」係
メールアドレス：bihaku-kikaku@city.okazaki.aichi.jp

おしゃべり、あれこれ。

山梨へ墓参に

今年の夏は暑かった。そんな真夏の八月四日、大学の同級生と恩師網野義彦氏の墓参に行ってきた。場所は山梨県笛吹市。盆地の山梨も暑いと聞いていたが、うわさどおり。墓は寺のなかにある古墳のまわりに設けられた墓地の一角にあった。墓石に刻まれた戒名は「善照院学峰史聖居士」。歴史学者にふさわしい戒名である。花とともに先生が好きだったお酒を供える。線香に火をつけ、手を合わせる。

先生が亡くなってから九年ほどになるが、その印象は鮮やかに残っている。高校時代、出版されたばかりの小学館日本の歴史『蒙古襲来』で網野氏の存在を知った。まさか、大学に入り教えを受けるとは思いもしなかった。授業で訳が分からない一枚の古文書について一時間半の報告をしたときに受けた、手厳しい指摘の経験は今でも自分の財産となっている。豪快な笑いとその声は今でも自分の脳裏で何度も再生される。没後に企画刊行された著作集十八巻が我が家の本棚に整然と並んでいる。毎月出されるたびに楽しみにしていたのは本に添えられた月報であった。多くの関係者によるその証言は先生の人柄を実によく伝え、共感できるのが何よりうれしかった。生きた網野史学にふれえたことを幸せに思う。（堀）

名鉄挙母線の想い出

今年度から転勤になり、通勤方法が変わったが、以前は職場までバスで通っていた。乗車駅は大樹寺駅だった。今ではすっかり小さくなったが、昔は名鉄挙母線の岡崎発の中核駅であり、昭和四十八年に廃止されるまでは、豊田市の上挙母駅を結ぶ岡崎北部の重要な足だった。今でもその名残で大樹寺駅構内には売店があり、軽い飲み物などを売っている。自分が小さいころは駅の前に住んでいたので、独り歩きができるようになると、駅に電車を見に行き、売店のおばさんにアイスキャンデーをもらうことが楽しみだった。もう少し年が上になると上挙母駅まで母にせがんで電車に乗せてもらい、駅の売店で買ってもらったアイスクリームを食べながらゆっくりと流れる車窓の風景を眺めていた。アイスクリームは外は普通のバニラだったが中は赤緑黄の三色のカラフルなものでそれがお気に入りだったことを覚えている。昭和四十八年に廃止された後も挙母線の跡は、所々に残され、井田大樹寺間の市内軌道線跡、大樹寺駅周辺、豊田市の渡刈駅周辺はよく痕跡を留めている。

一時期廃線を歩くことがブームになったことがあったが、今、挙母線の跡を歩くと幼いころの想い出が甘く蘇ってくる。（内）

編集後記　暑かった夏も終わり、秋風を感じる季節になりました。あいちトリエンナーレで週末には賑わいをみせた中心市街地も、普段の姿を取り戻すのでしょうか。当館も並行企画事業を終えると、「祈り」をテーマにした静謐な展示空間へと姿を変えることになります。（千葉）

表紙図版：《阿弥陀三尊来迎図》室町時代 高隆寺蔵

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館

開館時間　午前10時～午後5時
※最終の入場は閉館時間の30分前まで
休館日　月曜日（祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日）
年末年始　※展示替えのため臨時休館する事があります。

［岡崎市美術博物館ニュース／アルカディア］第58号 2013年10月発行
編集・発行　岡崎市美術博物館（マインドスケープ・ミュージアム）
〒444-0002　愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000（代表）

http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html

ARCADIA